
日本ロシア文学会会報 第24号 2004年8月

1. 2004年度(第54回)定例総会・研究発表会日程 2. 7月理事会
会関連事項 3. ロシア文学会賞決定 4. 会員異動 5. 会誌編集
委員会より

2004年度(第54回)定例総会・研究発表会日程

本年度の定例総会・研究発表会は、10月2日(土)、3日(日)両日、稚内北星学園大学で開催されます。大会の日程は以下の通りです。稚内はサハリンも近く、ロシアとは浅からぬ縁を持った町です。ロシア文学会の総会がこの地でおこなわれることは、きわめて意義深いことですので、会員諸氏には、ぜひ本年度の総会、研究発表会にご参加いただくよう、お願いします。10月1日(金)には、同じ稚内北星学園大学において、チャーホフ没後100年を記念したプレシンポジウムもおこなわれます(詳細は2ページ)。

17ページ~20ページに掲載した情報をご参照の上、同封の葉書で、総会当日のご予定等を9月10日(金)までにお知らせいただくよう、お願いいたします。

なお、昨年度の総会で評議員制度の廃止が決定されておりますので、本年より拡大理事会はおこなわれません。開催校の連絡先は17ページをごらんください。

プログラム

10月1日(金)	
理事会	: 16:00~17:30
プレシンポジウム	: 18:00~
10月2日(土)	
開会式	: 9:30~9:45
シンポジウム	: 9:45~12:15
各支部総会	: 12:15~13:25
研究発表会	: 13:30~16:20
ワークショップ	: 13:30~16:20
定例総会	: 16:30~17:30
各種委員会	: 17:30~18:00
懇親会	: 19:00~
10月3日(日)	
研究発表会	: 9:30~11:45

プレシンポジウム

10月1日(金) 18:00開場
18:30~21:00
稚内北星学園大学 講堂

第1部 セッション

「ピアノのかもめ 声のピアノ」
多和田葉子(朗読)& 高瀬アキ(ピアノ)

第2部 パネルディスカッション

「時空を超えて今チェーホフを語る」

パネリスト

山口昌男(札幌大学)
多和田葉子(作家)
今福龍太(札幌大学)
川端香男里(川村学園女子大学)
沼野充義(東京大学)・司会

共催：日本ロシア文学会
北海道大学スラヴ研究センター
稚内北星学園大学
後援：稚内市、宗谷支庁

本年は、日本ロシア文学会が主催するチェーホフ没後100年記念事業が他にも数多くおこなわれます。詳しくは15~16ページをごらんください。

2004 年度 日本ロシア文学会定例総会・研究発表会
第 1 日 10 月 2 日 (土) 午前 9:30 開会
9:30~9:45 開会式 (会場 新館 1401)
(挨拶: 日本ロシア文学会会長 川端香男里)

研究発表日程

10 月 2 日

第 1 会場 (新館 1401)

1 : 13:30~14:00

無底と救済の聖母 アポロン・グリゴリーエフの詩的イメージと、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』におけるその継承

発表者: 五島和哉(東大院)
司会: 鈴木淳一、安藤厚

本報告では、これまであまり研究されてこなかったグリゴリーエフの詩テキストに登場する бездна (無底) および、聖母のイメージについて分析し、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』との関連性をさぐる。これら二つのイメージは、ミーチャ・カラマーゾフが「ソドムの理想とマドンナの理想」という美の両極性について語るさい、および『カラマーゾフの人間』の二重性(二つの бездна) が語られるさい、に用いられるものであり、ドストエフスキーのテキストに見られる芸術観、世界観を考察する上で重要な概念である。また、「無底」イメージの源泉としてはシェリングの思想、「聖母」イメージの源泉としてはルネサンスのマリア像、民間信仰における聖母の地獄降りがあり、これら 19 世紀ロシアにおける思想の多声性、混交性を検討する。

2 : 14:05~14:35

ドストエフスキーの小説における喜劇的要素について

発表者: 小出雅樹(北大院)
司会: 鈴木淳一、安藤厚

ドストエフスキーの小説を構成する喜劇的側面について、いくつかの具体例を挙げてその特徴を明らかにし、喜劇的手法についておおまかな定義をしたうえで、その意義、役割について、いくつかの先行研究をふまえて考察したい。なおかつ、喜劇的要素と悲劇的要素など、相対立する要素が混合している、というドストエフスキー文学の性

質を、ジャンルの特質の面から、または創作手法の面から、および登場人物たちまたは読者の心理への影響、劇的效果などといった複数の視点から考察したい。

3 : 14:40~15:10

ドストエフスキーの作品における古典の引用

発表者: 木寺 律子(阪外大院)
司会: 井桁貞義、郡伸哉

ドストエフスキーの作品では、彼以前の多くの文学作品に触れているが、ドイツ古典主義文学作品への言及や引用も多い。ゲーテやシラーの作品に触れる場面では、過去の名作への敬意と皮肉の両方が見られる。『カラマーゾフの兄弟』では、イヴァン・カラマーゾフが自分の分身とも言える悪魔の幻覚と対話する場面で、この悪魔はゲーテの『ファウスト』に触れて「メフィストフェレスはファウストのところに現れて、自分は悪を望んでいながら、善ばかり行っていると自分について証明した。それは彼の好きなようにすればいいが、僕はまったく反対だ。僕はこの全世界で真理を愛し、善を望んでいる、たったひとりの人かもしれない。」と言う。ゲーテの『ファウスト』と『カラマーゾフの兄弟』の間のどのような違いが善と悪の関係を変えるのか。ドストエフスキーの作品における善と悪の関係を、ドイツ文学の影響を考慮しつつ検討する。

4 : 15:15~15:45

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と『地下室の手記』は似ているか - リリアン・ファースト説を追試する -

発表者: 梅村博昭(東農大)
司会: 井桁貞義、郡伸哉

村上春樹訳で話題を呼んだサリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』をドストエフスキー『地下室の手記』と比較したリリアン・ファーストという論者による論文(1978年)がある。両作品の主人公が自発的な逸脱者であること、にもかわらず人づきあいから完全には切れておらずコミュニケーションとノン・コミュニケーションの狭間に引き裂かれていること、強度の自意識にとらわれ、

高い自己評価と自己否定の間を揺れ動くこと、読者への呼びかけという手法をとっていることなどを指摘した興味深いものである。しかし二人称の読者 聞き手への態度が両作品では明確に違っているなど、相違も多々目につく。ミハイル・バフチンの研究が視野に入っていない点も今日では古いと感じられる。本報告ではファーストの論点を土台に両作品を読み比べることによって、今一度『地下室の手記』の特質を明らかにしたい。

5 : 15:50~16:20

マゼーパ・テキストとしての『ポルタヴァ』 「口ひげ事件」のプロット解析

発表者：角田耕治（早大院）
司会：井桁貞義、郡伸哉

プーシキンの『ポルタヴァ』（1829）は従来ピョートル大帝ものとしてとらえられてきた。主人公マゼーパに関しては史実どおりに描かれたはずのこの叙事詩に、ヘトマン期の伝説「口ひげ事件」が混入している。これがゆえに、北方戦争（1700-21）における「マゼーパ寝返り」が個人的動機に還元され、ロシアからみたときには「マゼーパ＝裏切者」と解釈される。ここはむしろ、このプロットが採用されたことによって「(ウクライナにとっての)民族の英雄として描かれなかった」ことに意義があるといえる。この「口ひげ事件」を根拠とし、パロックからロマン主義にかけて汎ヨーロッパ的にモチーフとされたマゼーパものの系譜の、とくにウクライナ＝マゼーパ・テキストとの相対において、作品の新たな位置づけをはかる。

第2会場（本館 302）

1 : 13:30~14:00

Русская литературная сцена в современной Германии

発表者：グレチコ・ヴァレリー（東大）
司会：佐藤純一、望月哲男

Русско-немецкие литературные связи имеют давнюю традицию. Если до революции русские писатели приезжали в Германию в основном как путешественники или на учебу, то после революции это были эмигранты, вынужденные покинуть Россию по политическим причинам. Среди русской колонии в Берлине, насчитывающей в 20-е годы двадцатого века около 400 тыс. человек, было немало писателей и литературоведов, включая такие имена, как Набоков, Белый, Шклов-

ский и др.

Перестройка и последующий распад СССР вызвали новую волну русской эмиграции. Сейчас в Германии насчитывается около 2 млн. русскоговорящих людей. Вновь оживилась русская литературная жизнь, пишутся книги, издаются многочисленные газеты и журналы. Русская литературная сцена в Германии весьма разнообразна, начиная от писателей старого «эмигрантского» типа, пишущих по-русски и для русских, и заканчивая писателями нового поколения, ориентирующихся преимущественно на немецкую публику. Доклад ставит своей задачей дать обзор русской литературной жизни и проанализировать специфику ее развития в иноязычном окружении.

シンポジウム

パネルディスカッション チャーホフ『サハリン島』 とその周辺

時間：10月2日(土)9:45~12:15

場所：第1会場（新館 1401）

パネリスト

インガ・ツペンコーヴァ（ジ
/サハリンスク、チャーホフ『サハリン島』記
念博物館）

アレクサンドル・チュダコーフ
（エスク 世界文学研究所）

黒川創（作家・評論家）

対論者

中本信幸（神奈川大学名誉教
授）

司会

井桁貞義（早稲田大学）

共催：日本ロシア文学会、北海道大学ス
ラヴ研究センター

後援：稚内市、宗谷市庁

2 : 14:05~14:35

ベラルーシ文学とチェルノブイリ原発事故

発表者：越野剛(北大スラ研)

司会：佐藤純一、望月哲男

1986年のチェルノブイリ原発事故はソ連のみならず、全世界に衝撃を与えた出来事だった。チェルノブイリを描いた文学作品が最も多く書かれているのは、ロシア・ウクライナと並んで深刻な被害を受けたベラルーシである。本発表では現代ベラルーシ文学において原発事故がどのように描かれているかを明らかにする。

発表の前半では、事故発生から現在までに書かれた「チェルノブイリ文学」の系譜を主に散文作品を中心に概観する。これらは3つのグループに分けることができる：原発事故そのものを描く作品、被災地における事故後の「現在」の生活を描く作品、事故や汚染地域を何らかの象徴や文学的装置として用いる作品。

発表の後半では、こうした「チェルノブイリ文学」に特徴的なテーマを4つ選び出して論じる：

事故に関連した新造語の問題、ブラックユーモア、事故に関する記憶の改変、居住禁止地域を舞台にする「ゾーン小説」。

3 : 14:40~15:10

「受動的な悪魔」と放浪者 アンドレイ・プラトノフの『土台穴』における受動性と受難をめぐる

発表者：古川 哲(東大院)

司会：沼野充義、久保久子

プラトノフの『土台穴』は、1920年代末のソヴィエト政権の政策に翻弄され犠牲になる人々の世界を描いている。その意味でこの作品は悲劇である。この悲劇性が際立つのが「活動家」の死においてであり、彼において登場人物たちの受動性と受難が明瞭に結びついて現われる(「受動的な悪魔」は作品において「活動家」を指す)。それに対して、そのような登場人物たちを相対化する役割を持っているのが、放浪者たるヴォーシェフである。彼は、環境からの刺激に対して積極的に受動的たりうる資質を持つ点で、「活動家」と異なる。作品の結末において彼は「満たされた知恵」を得て放浪をやめる。実は、放浪者が何かを悟り放浪をやめるといふ、プラトノフにおいて繰り返されてきたプロットは『土台穴』において最も完成された表現を得ている。

「活動家」と放浪者の対比を軸に『土台穴』の悲劇性を論じつつ、この作品の歴史性を考察することが本発表のねらいである。

4 : 15:15~15:45

ナボコフの眼 近代的視覚とメタフィクション

発表者：毛利公美(北大スラ研)

司会：沼野充義、久保久子

ナボコフは、彼岸と現世の関係や両者を隔てる壁の問題を表現するために、虚構と現実が交錯するメタフィクションの構造を用いた。二つの世界の関係は、「見ること」と「見られること」の諸相として捉えることができる。見えない壁の向こう側の世界の真実を探ろうとする芸術家の眼は、写真や映画といった近代の視覚芸術との接触の中で育てられた。本報告では、作品の中に登場するカメラ・オブスキュラ、写真、映画といった様々な光学機械や視覚芸術の媒体を作家の世界観を読み解く鍵として分析を試み、ナボコフのメタフィクションを近代的視覚の発展と関連づけて論じる。

5 : 15:50~16:20

シギズムンド・クルジジャンフスキイにおける《пузырь》

発表者：上田洋子(早大院)

司会：沼野充義、久保久子

シギズムンド・クルジジャンフスキイ(1887 - 1950)の諸作品には、《пузырь》および《пузырек》というイメージがしばしば現れる。それが初めて登場するのは初期短篇《Четки》(1921)で、ある歌手のシャープのラの音を閉じ込めたガラス瓶である。オーチェルク《Штемпель: Москва》(1925)では、表徴都市モスクワの土台の下にある空洞となり、そして《Круб убийц букв》(1927)になると、溺死体の口から漏れる空気の泡 = 死者が書き残した言葉のメタファーとなる。中身のない透明の球は、表面にどんなラベルを貼っても、任意の物質で中身を満たすことのできるものである。文字として、音として、意味作用としての言葉のありように極めて意識的であったクルジジャンフスキイの作品では、このイメージが次第に言葉の表徴作用と結びついていくことになる。《пузырь》のイメージの手がかりとして、この作家と言葉の関係を探ってゆく。

会場案内

1日

理事会：本館1階会議室
プレシンポジウム：講堂

2日

開会式：新館1401
シンポジウム：新館1401
各支部総会

支部によっては総会が開られない場合もあります。

北海道支部：本館402
東北支部：本館302
関東支部：新館1401
中部支部：本館303
関西支部：新館1301
西日本支部：本館401

研究発表会

第1会場：新館1401
第2会場：本館302
第3会場：本館303

ワークショップ：新館1301

総会：新館1401

各種委員会

委員会によっては開られないものもあります。

編集委員会：新館1301
学会賞選考委員会：本館302
国際交流委員会：本館303
広報委員会：本館401

3日

第1会場：新館1401
第2会場：本館302
第3会場：本館303
第4会場：新館1301

2日、3日両日

事務局（本部）：本館312
休息室：本館301およびロビー
書籍販売：3階渡り廊下

会場での録音、および書籍等の販売を希望されるかたは、事務局までお申し出ください。

第3会場（本館303）

1：13:30~14:00

モダリティの意味を含む文の平行性について—「нельзя не + 不定形」及び「не мочь не + 不定形」の両構文に関する比較

発表者：阿出川修嘉（東外大院）
司会：米重文樹、金田一真澄

現代ロシア語において、ある種のモダリティの意味を含む文の中には、その意味を表わす形式として、無人称文の形式と、人称文の形式との双方が用意されているものがあり、その場合この両形式は平行的であると説明されることが多い。

本報告では、こうしたモダリティの意味の中から特に「～せざるをえない」という意味を取り上げ、それを表わす「нельзя не + 動詞不定形」及び「не мочь не + 動詞不定形」という二つの構文の比較を試み、その「平行性」について再考する。比較に際して、その用法によってそれぞれの構文を特徴付けるといった観点から、既存コーパスからのデータを用いて、この両構文で現れる動詞不定形の語彙的意味を中心に据えて考察を行なう。

また同時にこれら動詞不定形の体の形態の差異についても考慮し、その結果が示唆する、動詞不定形の場合における「体のペア」の概念をめぐる問題点の提起も行なう。

2：14:05~14:35

主部に数詞を含む文の述語形態に関するコーパス分析

発表者：秋山真一（東外大院）
司会：米重文樹、金田一真澄

Пришло сто студентов. / Пришли сто студентов. のように文の主部に数詞が含まれる場合の述語の形態について、単数形態が用いられるか、複数形態が用いられるかを分析する。分析は既存のコーパスデータに基づいて行うものとし、使用するコーパスデータはウプサラ大学の現代ロシア語コーパスのものとする。

80年文法をはじめとする先行研究は文の主部に数詞が含まれる場合の形態について、主部と述語との語順、主部における数詞以外の限定辞の有無、文中における主部への統語的な焦点やテーマ・レマの問題など多くの点を指摘しているが、そうした先行研究の分析について支持するデータ、反例となるデータを具体的な数値データと共に取りあげる。

また、発表者の視点として主部を構成する数詞の表す数の大きさと、述語形態の単数を選択する傾向・複数を選択する傾向との相関性についても分析を試みる。

3 : 14:40~15:10

ウクライナ語の接頭辞 *шо* による時間表現
単純反復と漸次的変化

発表者：小川暁道（東大院）
司会：米重文樹、金田一真澄

本発表では、ウクライナ語の時間を表す状況語のうち、接頭辞 *шо* を用いた表現を扱う。

接頭辞 *шо* + 生格、接頭辞 *шо* + 対格という、反復を表す二つの表現形式がある。この二つが表す内容の違いを調査。今までに出版されたウクライナ語学に関する文献ではこの現象についての記述は確認されていない。前者は均質の動作・状態がただ単に繰り返される単純反復、後者は動作・状態が繰り返される毎に動作・状態そのものやその結果に何らかの変化が伴う漸次的変化という性質を持つ傾向がある。この二つの表現形式の差異は隔絶性を持つものではなく、接頭辞 *шо* + 生格で漸次的変化、接頭辞 *шо* + 対格で単純反復を表すこともある。

以前の調査では、特に個人による使い分けと地域的な使い分けという傾向が見られた。

個人による使い分けは、個人の居住地や出身地による地域的な問題に帰すると考えられる。地域的な特徴を調査し、その傾向を探ることが本発表の目的である。

4 : 15:15~15:45

「露船打払令」は絶対だったかーゴロヴニン
事件時の日本側の対応

発表者：有泉和子（東大史料編纂所）
司会：安村仁志、渡辺雅司

所謂 1807 年(文化 4)「露船打払令」、1825 年(文政 8)「異国船打払令(無二念打払令)」に代表される異国船取り扱いに関する我国近世後期の一連の法令は、その呼び名から一般に、強硬な幕府の対外姿勢を示したものと受け取られがちである。

だが、これらはいくまで、フヴォストフ・ダヴィドフ事件その他の外国船により引起された騒動により沸騰してしまった国内世論に対する幕府の姿勢を示し、さらに統制不可能な状態にまでなりがちな流言蜚語を鎮めるためのものであり、必ずしも、国家として諸外国に対し、対外的に強硬姿勢を打ち出したものではない。現場による実際の運用もまた、比較的穏やかなものであった。

報告者は、主に「露船打払令」を例にとり、ゴロヴニン事件発生時、及び解決時の事件現場と幕府の対応に関する日露両国史料に基付き、上記事項の一端を明らかにする。

5 : 15:50~16:20

古儀式派による終末予言否定について

発表者：塚田 力（北大院）
司会：安村仁志、渡辺雅司

ロシア正教の古儀式派は 17 世紀に新儀式派教会から分離して以来、しばしば終末が差し迫っていることを訴えてきた。近年においても彼らの一部は新約聖書のヨハネ黙示録に記されている反キリストの到来が近いこと、ロシア政府が導入しつつある納税者番号制度が反キリストの刻印の兆しであることなどを訴え続けている。

しかし、全ての古儀式派信徒が終末論の不安をもっているわけではない。世の終わりが近い事、政府が反キリストの手先に乗っ取られていることを否定するような潮流も確実に存在する。

この報告では、ここ数年の古儀式派の教会出版物中に見られる終末予言否定論、特に M・F・ニコノフのそれを概括する。またそれが最大教派である Русская Православная Старообрядческая Церковь の中でどのように受け止められているかを教会出版物やアンドリアン府主教の発言などでみていきたい。

会費納入のお願い

会費納入のお願い

事務簡素化のために、今年度分(2004 年度分)の学会費 8,000 円を、同封の振替用紙にてお振り込みくださるようお願いいたします。なお、振替用紙による学会費納入に際しては、郵便局の領収書をもって本会の領収書に代えさせていただきます。

また、未納分に関しましては、振込用紙裏面にある記録をご参照の上、その分も今年度分と併せてお振り込みくださるようお願い申し上げます。(納入記録に誤りのある場合はその旨事務局までお申し出ください。また、行き違いのある場合はご容赦ください。)

維持会費納入のお願い:維持会費(1口 5000 円)は、通常の学会費と並んで学会運営の主たる財源をなしております。学会会費のほか一口以上の維持会費の納入をお願い申し上げます。

ワークショップ 近現代ロシアの文化的

ナショナリズム

2日、13:30~16:20

新館 1301

1991年のソ連邦解体以後、ソ連時代の経験を認識し直そうとする試みが、(とりわけロシア人による)ロシア研究の一つの軸になった観がある。その中で、1917年や1991年という歴史的結節点を連続性として捉え直す傾向は徐々に一般化しつつあると考えられる。その傾向の中で、特に重要な問題機制の一つがロシア・ナショナリズムであることは、論を待たないであろう(ソ連国歌の旋律を用いたロシア連邦国歌は、重要な事例の一つとなろう)。今日までのロシア研究においても、ロシア・ナショナリズムは問題とされてきたが、ほとんどの場合には、政治イデオロギーとして扱われてきたと思われる。だが、アントニー・スミスも述べるように、ナショナリズムは「一種の政治的イデオロギーや社会運動であるのと同時に、文化の一形態ともみなされる」ものであって、それらは相補的であり、「たんにイデオロギーあるいは政治形態だけでなく、文化的現象としても取り扱わなくてはならず、文化におけるその現れをみななければ不十分であると我々は考える。このワークショップにおいては、近現代ロシアの思想・芸術を素材として、ロシアの文化的ナショナリズムについて、実証的に考える第一歩としたい。

報告者とテーマ

貝澤哉(早稲田大学)

19世紀後半から20世紀初頭のロシアにおける文学の国民化 文学研究と文学教育より

久野康彦(放送大学)

ロシア民謡、ジャズとロシアのナショナリズム~第二次世界大戦におけるリジャ・ルスラーノヴァとレオニード・ウチヨーソフ~

中村唯史(山形大学)

マンデリスタームのアルメニア巡礼

大須賀史和(神奈川大学)

ソヴィエト愛国主義:政策・イデオロギーと文化の歴史的相互関係

楯岡求美(神戸大学)

大祖国戦争と演劇における祖国防衛のテーマ

梅津紀雄(埼玉大学)

音楽における国民主義の系譜 音楽史劇とナショナリズム

10月3日

第1会場(新館 1401)

1:9:30~10:00

B.K.トレジャコフスキイ「ピョートル大帝の死に寄せる哀歌」旧版と新版の文 「ミクロテクストロギア」的側面から見た名詞について

発表者:中澤朋子(早大院)

司会:川端香男里、木村崇

1725年、B.K.トレジャコフスキイは「ピョートル大帝の死に寄せる哀歌」という作品を書いているが、1752年に彼は自身の手でこの哀歌を書き直している。これら旧版・新版のテキストにおいて用いられているその「言語」を幾つかのレベルに分け、すなわち歴史文体論の手法をとり、それらが旧版・新版においてどのように変化しているかを比較してみる。そのなかでも、「ミクロテクストロギア」的側面から名詞を主にとりあげ、その語彙の使用の変化を詳細に見てみたい。また、「文法」という分類も考慮に入れ、それら名詞の形態論的側面の古語的用法・新語的用法についても考える。併せて、音声学の側面からみた歴史的变化としての充音と無充音という現象を考慮に入れると、必然的にその作詩法についても考慮に入れざるを得ない。よって、形態論や語彙論といった内面的特徴の考察を主たる目的としつつも、外面的特徴の変化についても少し検討してみたいと思う。

2 : 10:05~10:35

『現代の英雄』にみられる演劇的要素
『公爵令嬢メリー』を中心に

発表者 : 山路明日太(北大院)
司会 : 川端香男里、木村崇

Ю. Лотман が指摘しているように、19 世紀初頭のロマン主義的ロシア貴族には演劇的な生活を送ることで日常的な退屈を紛らわせようとする傾向があった。発表ではその後の時代にある『現代の英雄』では、こうした演劇的生活の影響がどのように表れているか、とりわけ演劇的要素が重要な役割を担っていると思われる『公爵令嬢メリー』の章を中心に、報告する。

まず、作品にみられる演劇的語彙を仔細にみていくことにより、テキストを彩る演劇の世界について考察し、さらにベチョーリンの自己や他者に当てはめる役割意識について触れる。次に物語の背後にある演劇的特性について検討する。その際には作品全体に色濃く感じられる「ベチョーリンの筋書き性」や「人間の演技に対する過剰なまでの反応」について触れることになる。以上の論点を踏まえ、演劇的語彙やその周辺語彙を考察する事から、ベチョーリンの理想と実際の役割との矛盾点について総括する。

3 : 10:40~11:10

「周縁」を文学史に位置づける オドエフスキイの「社交界小説」をめぐる読みの(脱)構築

発表者 : 安達大輔(東大院)
司会 : 川端香男里、木村崇

1830 年代にオドエフスキイによって書かれた「公爵令嬢ミミ」「公爵令嬢ジジ」は、文学史のなかでは、ロマン主義からリアリズムへの過渡的なジャンルとされる「社交界小説」に属している。文学史のいわば周縁に位置づけられることで、このふたつのテキストにおいて何が周縁化されているのか、文学史記述、フェミニズムの枠組からなされた先行研究を読み直しつつ考察する。

具体的には、まず、「ミミ」「ジジ」において現実/虚構の区別を脱構築する「噂」「手紙」という言説のメディアに注目し、テキストによる「現実」のリアリズムの表象という図式が(不)可能になる契機を分析する。このとき、「法 = 言語の秩序からの女性の排除」という物語の反復によって、フェミニズムがリアリズム中心の文学史と協働してしまう場合がある。それに対し、あくまでフェミニズムの読解を行なうさいの介入の可能性を探る。

4 : 11:15~11:45

ブロークの詩篇『恐るべき世界(Страшный мир)』に見るストリンドベリの影響

発表者 : 岩崎理恵(東大院)
司会 : 川端香男里、木村毅

本報告では、Д. М. Шарыпкин の研究を引き継ぎ、スウェーデンの劇作家ストリンドベリの戯曲『死の舞踏(原題 Dödsdansen 、露語訳 Пляски смерти)』が、ブロークの詩篇『恐るべき世界(Страшный мир)』に与えた影響を、「悪そのものを目的とした悪」の具現化という観点において検討する。

ストリンドベリの『死の舞踏』は、他人の生に寄生することによってしか生きられない「吸血鬼的な性質」を持つエドガ という男が、周囲の人々にもたらす災いの数々を描いている。Шарыпкин はエドガ を、戯曲と同名のブロークの詩篇に登場する、生者のふりをする骸骨に重ねているが、このような、他者に害悪を及ぼしつつ生きる寄生的存在は『恐るべき世界』の中の *Есть игра...* , *Демон* , *Черная кровь* 等の作品でも描かれており、これらの形象にも、エドガ の体現する悪の片鱗を見出すことが出来ることを指摘する。

第 2 会場(本館 302)

1 : 9:30~10:00

「エリザヴェータ・バム」解釈の可能性 現実の理論と芸術の理論

発表者 : 本田登(東大院)
司会 : 望月恒子、貝澤哉

1928 年、オペリウーは「左翼の 3 時間」と呼ばれるパフォーマンスを行った。そこではオペリウー宣言が読み上げられ、中心的なメンバーであったダニール・ハルムスの戯曲「エリザヴェータ・バム」が上演された。ザウミと訣別し、新たな芸術的手法を迫及するオペリウーにとって、このパフォーマンスは、自分たちの考えを世に問う数少ない機会となった。

本研究では、オペリウーに関する様々な言説を参照しつつ、「左翼の 3 時間」で上演された戯曲「エリザヴェータ・バム」を読み解いていく。オペリウー宣言では、芸術の理論は現実の理論と異なるという考えが展開されていたが、「エリザヴェータ・バム」でハルムスが用いた芸術の理論とはどのようなものなのだろうか。また、この戯曲、ひいてはオペリウーという存在は、ロシア・アヴァンギャルドという文脈でどのように位置づけら

れるだろうか。本研究によって、こうした問題に新しい視点を加えたい。

2 : 10:05~10:35

ブーニン文学における「始まりも終わりもない」時間について

発表者：宮川絹代(東大院)
司会：望月恒子、貝澤哉

ブーニン文学、特にその本質的要素が凝縮されていると考えられる亡命後の創作においては、記憶とエロスという二つのテーマが重要な意味を持っている。それらのテーマを従来の研究のように個別に検討するのではなく、時間というひとつの視点から関連性を求め、そこからそれぞれを考察することによって、ブーニン文学の本質的特徴を浮き彫りにすることが可能である。それは、記憶における個と全宇宙との超越的連続性、またエロスにおける時間の連続性を断ち切る超越的瞬間に現れた「始まりも終わりもない」時間であり、そうした内的時間が重層的に構築されたところに、ブーニンの文学的世界は成り立っている。そして、そのような時間は印象主義的な刻々と変化するイメージに具現し、主観と客観、絵画性と音楽性、リアリズムとモダニズムというような様々な対立を滅却する根源として、ブーニン文学の諸問題群を貫く軸となっているのである。

3 : 10:40~11:10

マトヴェーエフ家文学の研究 亡命・越境・辺境文学の事例として

発表者：ヨコタ村上孝之(阪大)
司会：望月恒子、貝澤哉

ニコライ・マトヴェーエフは1865年に函館で生まれ、ウラジオストクでジャーナリスト、地方史家、詩人、散文家として顕著な文化的活動をした。革命後は亡命し神戸で晩年を送った。子孫の多くは文学者になり、同じくディアスポラの生活を送った。息子ベネディクト・マルトは未来派の詩人として活躍したが肅清される。孫イヴァン・エラーギンは、ベルリンを経てニューヨークに移住し、詩人として大成した。本発表は、極東ロシアという周縁的な土地から起こり、日本、ヨーロッパ、米国と拡散し、それぞれの場所でさまざまな変容を受けていった、マトヴェーエフ家の人々の文学的活動を分析することによって、「亡命・越境・辺境」文学のあり方を考えるものである。アムール地方はロシア人である彼らにどう表象されていたのか、ニューヨークのロシア人社会はどうか表現されたのか、政治的不遇はどんな文学的・思想的影

響を与えたのかなどを、作品を通じて見ていきたい。

4 : 11:15~11:45

B・ネクラソフ『スターリングラードの塹壕にて』から見る戦争小説の解釈

発表者：佐藤亮太郎(北大院)
司会：望月恒子、貝澤哉

かつてソヴィエト文学の一潮流であった戦争文学であるが、それは現在では殆ど注目されていない。戦争文学が作品の中に、どのような内容を含んでおり、どのような議論が交わされたのかということ、第二次大戦後の戦争文学の嚆矢とされるB・ネクラソフ(1911-1987)の処女作『スターリングラードの塹壕にて』(1946)を素材にして論じる。

まず、『スターリングラード〜』の主人公の視点の不動性、描写の限定性という作品の特徴と、民衆の心情の発見という内容の具体例を示す。次に1994年の「新世界」誌に掲載されたH.エサウロフの論文とJ.ラザレフによる論文を軸として、作品に付きまとう政治的イデオロギーの存在と作品解釈の時代によるコンテクストの違いの議論を見る。そして同時代批評と戦争小説の古典としての本作に対する批評から、戦争小説の「読み」について再考する。

第3会場(本館303)

1 : 9:30~10:00

ロシア文学・思想における「自然観」

発表者：小林銀河
(東大、学振特別研究員)
司会：坂内徳明、栗原成郎

地球環境問題は人類が協同して取り組まなければならない大きな問題であり、我々は人間対自然の関係を真剣に考え直さなければならない状況に置かれている。ロシアの精神史についても、この現代の問題意識に基いた視点に立ってそれを捉え直してみることは決して無意味ではないだろう。報告では、Ф.М.ドストエフスキー、B.H.ヴェルナツキー、Д.С.リハチョフその他のロシア人作家・思想家の著作を取り上げながら、そこで描かれ、論じられている「自然観」の特徴を比較・検討する。また、日本人研究者がロシアの思想・文学を論じる際、そこに「日本人の自然観」が見え隠れするケースが見受けられるので、それも指摘しつつ、日本・ロシア両文化における自然観の対比研究の手がかりとしたい。

2 : 10:05~10:35

日露両言語における「怒り」、「喜び」を意味する類義語の対照研究

ノワ・スヴェトラナ、山田隆（札幌大）
司会：坂内徳明、栗原成郎

発表者：グリツェンコ・エフゲーニヤ
（北大院）
司会：坂内徳明、栗原成郎

本稿では日本語とロシア語とにおける人間の基本的な感情、すなわち「怒り」と「喜び」を意味する動詞を比較してみる。

「怒り」、「喜び」を意味する類義語の語構成については、ロシア語は派生語であるのに対し、日本語は和語の単純語、和語と漢語の複合語、そして派生語がある。さらに、日本語には「怒り」を表す擬態語（「ぶっつんする」）がある。

「怒り」、「喜び」を表す日本語は語同士の構成要素が類義関係にあるため、語全体も類義関係をなすという類義語が多い（複合語のほとんどがこのような類義関係にある。）。

そして、字順が逆になっているものもあり、「腹立つ」と「立腹する」のように、和語の構成要素が音読みされ、位置が入れ替えられたものもある。また、「きれる」-「打ち切れる」のように、もともと存在した語の強調表現がつくられたというようにできた類義語も見られる。

日本語の「喜び」を意味する「驚喜する」、「狂喜する」、「恐悦する」、「随喜する」、「喜悦する」、「愉悦する」をロシア語で表す場合、単語が存在しないため、連語で表現しなければならない。

日本語の「怒り」と「喜び」を意味する類義語（動詞）の中には漢語が多い（特に感情の程度が強い「大」レベルの語）。ここで漢語の造語能力がはたらいっていると考えられる。しかし、これらの漢語はかたい文章語が多数である。一方、ロシア語には文章語は一つもなく、主に日常語である。

ロシア語には「怒り」を意味する感情が強い「大」レベルの語が多い。これらの語が日常生活の中で用いられるのは、ロシア人の特有な発想であろうか。

また、ロシア語には「喜び」を意味する感情の「中」レベルの語はない。これもロシア人のものの方に関係しているであろう。

「怒り」、「喜び」を意味する日本語にもロシア語にも多義語（転義）が見られる。

「怒り」、「喜び」を表す類義語の数は日本語の方が多いいのは漢語が多いからであると思われる。

3 : 10:40~11:10

В поисках компромисса（о работе над учебником《Русская речь》）

発表者：ジダーノフ・ヴラジ
ーミル、鈴木淳一、ユルマ

Учебники русского языка нового поколения, нацеленные на подготовку к ТРКИ, несмотря на высокий профессиональный уровень исполнения, в основном, ориентированы на студентов-иностранцев, изучающих русский язык в России. Наш авторский коллектив, разрабатывающий совместно с Головным центром тестирования материалы ТРКИ для японской аудитории, начал подготовку учебника《Русская речь》, соотношенного с принятыми в РФ стандартами ТРКИ Элементарного и Базового уровней и ориентированного на студентов, изучающих русский язык (как основной иностранный) в Японии.

Основная задача учебника заложить основы языковой компетенции по четырем видам речевой деятельности: чтению, письму, говорению и аудированию и, вместе с тем, сформировать речевые умения и навыки, необходимые для успешной сдачи ТРКИ. При решении этой задачи мы старались подбирать наиболее оптимальные варианты текстов, заданий, аудиоматериалов, соответствующие стандартам ТРКИ и, в то же время, доступные и интересные для японских студентов. Разделы учебника, каждый из которых посвящен определенной коммуникативно-ситуативной теме, состоят из шести частей (текст, задания по тексту, диалоги, говорение, письмо, домашнее чтение) и рассчитаны как на аудиторную, так и на самостоятельную работу студентов.

第4会場（新館 1301）

1 : 9:30~10:00

『Мир Искусства（芸術世界）』誌の研究

発表者：平野恵美子（東大院）

司会：堀江新二、渡辺雅司

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ロシア（と西欧）では、芸術関係の雑誌の出版ラッシュだった。とりわけ1898年から1905年まで発行された『Мир Искусства（芸術世界）』誌は、単に芸術批評文の発表の場であるにとどまらず、そこに掲載された一流の画家達によるイラストや豪華な装丁等によって、雑誌それ自体が一個の芸術物であ

ったと考える。そこに掲載されたディアギレフやベヌアらによる批評やイラストを分析することによって、当時のロシアの、また後にバレエ・リュスを結成したディアギレフとその仲間達の芸術の方向性を考察する。また発表者はイギリス留学中に、National Art Libraryにて、『Мир Искусства (芸術世界)』誌に掲載されたイラストの多くをデジタルカメラに収めることに成功した。発表ではこれらのカラー写真を効果的に利用したい。

2 : 10:05~10:35

カシヤーン・ゴレイゾフスキーのアヴァンギャルド・バレエ『美しいヨーゼフ』

発表者：村山久美子(早大)
司会：堀江新二、渡辺雅司

本報告は、ロシア・バレエのモダニゼーション研究の一環として、ゴールスキー、フォーキン、フォレッジレル、ロプホーフの創作に関する拙論に続くものである。ゴレイゾフスキーは、ロシア革命を二十代で迎え、革命に頭から突進し、1920年代には、バレエ界を代表するアヴァンギャルド芸術の旗手として次々と実験的な作品を発表し、注目を集めていた。そのゴレイゾフスキーの20年代の創作の集大成と言われる失われた傑作が、1925年にモスクワのポリショイ劇場で初演された『美しいヨーゼフ』である。このバレエは、原作の伝説の解釈とその振付演出の新しさ、バレエの舞台で初めて用いられた構成主義の美術、そして、作品を深く理解したダンサー達の名演によって絶賛された。今回は、『美しいヨーゼフ』を中心に分析しつつ、十分に明らかにされていないゴレイゾフスキーの1920年代の活動を探りたい。

3 : 10:40~11:10

ロシア文学者昇曙夢の再評価についての提言

発表者：和田芳英(元・大谷高校)
司会：堀江新二、渡辺雅司

昇曙夢は生前190余冊の著・訳書を上梓、日本最初のロシア文学者として不朽の学問を樹立した。二葉亭没後、19世紀末から20世紀初頭に至るロシア文学を精力的に翻訳・紹介。芥川や志賀等、大正・昭和を代表する作家達は曙夢訳のロシア文学を読んで、創作上の糧とし、自らの世界を創りあげている。後年、武者小路実篤は明治末から大正時代にかけて「昇曙夢の時代」があったと述懐している。又、魯迅は大正4年刊行の曙夢の名著『露国現代の思想及文学』(新潮社・後改訂増補版改造社)を購入し、昇の他の訳本を重翻している。

昇曙夢の功績に対して、昭和23年発行の『ロシア文学研究』第1集は特集を組み、「研究と翻訳の50年(古希の齢を迎えて)」並びに「昇先生著作年譜」を掲載している。だが、今日では彼の名前は、1972年初版発行の『世界大百科事典』(平凡社)には記述されているものの新装版に於ては欠落している。昇曙夢の再評価を提言したいと思う。

4 : 11:15~11:45

Анализ перевода на русский язык произведения Ерошенко 《Цвет Справедливости》

発表者：アニケーエフ・セルゲイ(ロシア極東大学
函館校)
司会：堀江新二、渡辺雅司

Для исследователей творчества В. Ерошенко особый интерес представляет проблема перевода его произведений на русский язык. Как воспринимается Ерошенко в России зависит от того, какими были его русские переводы. Каким увидели русские читатели перевод 《Цветка》? Почему перевод конспективен? Это первая попытка анализа перевода одного из произведений. Источник:高杉一郎『エロシエンコ全集』。みすず書房：1959.P.180-192.

理草花

<...>信じられない? そんな人に会ったことがない? 坊ちゃん、すこしお待ちなさい。いまにもう飽き飽きするほど、そんなひとをたくさん見るようになるでしょうから...しかしなるたけながく、そんなおそろしい時のこないように祈りなさい。だが、祈ってもだめだ!世のなかにはそんなものがあまりに多くありまするんですもの...<...>

Цветок Справедливости

...Тебе не верится? Ты никогда не встречал их? Погоди, наступит время и ты поймешь, что их немало на свете... (перевод с японского З. Супруненко. Цит. по Василий Ерошенко. Избранное М. 1977)

Цветок Совершенства

...Ты мне не веришь? Ты не встречал таких людей? Погоди немного, мой хороший! Их будет столько, что ты перестанешь обращать на них внимание. Да ты молись о том, чтобы такое страшное время как можно дольше не наступало. Но, пожалуй, молитвой здесь не поможешь! Среди нас таких людей не просто много, их очень много... (発表者露訳)

7月理事会関連事項

7月の理事会は、7月10日(土)に上智大学四谷校舎で開催されました。主な報告事項および審議事項は以下の通りです。

入会者14名(「会員異動」の項参照)の入会が認められた。

本年度総会、研究発表会の日程が承認された。

ロシア文学会賞決定

7月10日におこなわれたロシア文学会賞選考委員会で、第1回ロシア文学会賞の受賞者が、以下のように決定しました(受賞論文は会誌35号に掲載済み)。授賞式は、10月2日の総会時におこないます。詳しくは会誌第36号をご覧ください。

齊藤毅、加藤栄一

会員異動

入会(2004.5~2004.7、受付順)
氏名(所属/支部)専攻分野(推薦者)

古川哲(東外大院/関東)ロシア文学
(亀山郁夫/渡辺雅司)

角田耕治(早大院/関東)ロシア文学、
比較文学(伊東一郎/大石雅彦)

中澤朋子(早大院/関東)ロシア語学、
トレジャコフスキー(伊東一郎/
貝澤哉)

宮川絹代(東大院/関東)20世紀ロ
シア文学(安岡治子/西中村浩)

五島和哉(東大院/関東)19世紀ロ
シア文学(安岡治子/西中村浩)

佐藤亮太郎(北大院/北海道)ソビエ
ト文学(大西郁夫/安藤厚)

小出雅樹(北大院/北海道)ロシア文
学(安藤厚/大西郁夫)

小川暁道(東外大院/関東)ロシア語
学、ウクライナ語学(中澤英彦/
匹田剛)

グリツェンコ・イゲニヤ(北大/北海道)言
語学、類義語の研究(大西郁夫/
望月恒子)

河尾基(東大院/関東)ルーヴニコフ(沼
野充義/金沢美智子)

中神美砂(東外大院/関東)E・R・ダ
ーシコフと18世紀ロシア社会(亀山郁
夫/渡辺雅司)

塚田力(北大院/北海道)ロシア宗教思
想史、古儀式派の歴史(安藤厚/
望月恒子)

和田芳英(元・大谷高校/関西)昇曙
夢(法橋和彦/扇千恵)

ズビャギン・フォードル(阪外大院/関西)
動詞のアスペクト、言語学(林田
理恵/五十嵐徳子)

(2003.11~2004.5、会報22号、23
号に掲載済み)尾子洋一郎、ミハイロ
バ・ユリア、阿出川修嘉、児島康宏、
篠崎直也

退会(2004.5~2004.7、受付順)
ガヴリロワ・マリア(関西)、山本良
太(関西)

(2003.11~2004.5、会報22号、23
号に掲載済み)

井上研二、佐々洋子、鈴木康雄、大庭
佐知子、上田雅子、秋元里予

ご逝去

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

飯田規和、小島基次

会誌編集委員会より

会誌「ロシア語ロシア文学研究」次号（第37号・2005年10月刊行予定）への投稿申し込みは、本年11月末日が締め切りです。A4用紙1枚（1000字程度）の論文要旨を、事務局宛にご郵送ください。申し込みの論文要旨の様式は自由ですが、要旨のほかに、氏名・住所（連絡先）・電話・FAX・メールアドレスを記した別紙を必ず添えてください。海外在中などの、やむをえない場合に限り、FAX、メールなどでの申し込みが可能です。この投稿申し込みは、今年度の学会報告をされたかどうかに関係なく、すべての投稿希望者に必要です。論文以外の原稿（書評、学会展望など）の投稿も歓迎します。掲載される論文等は、すべて投稿審査を受けることになります。投稿締め切り後、各投稿申し込みに対して査読審査員を決定します。申し込みの段階で、編集委員が投稿をお断りすることはありませんので、申し込み後は、すぐに審査用論文原稿の執筆にとりかかってください。審査用論文原稿提出の締め切りは、来年1月末日（送り先は後日お知らせします）。審査結果は4月はじめに通知いたします。投稿申し込みにあたっては、「日本ロシア文学学会会誌規定」「会誌執筆要項」「投稿審査要領」（会誌36号に掲載）もご参照ください。会誌中の「学会報告要旨」掲載については、投稿申し込みは不要です。

稚内へのアクセス、宿について

本年は、稚内の「北都観光株式会社」に、稚内へのアクセス、宿についての手配をお願いしています。

稚内までの飛行機の座席は、確保していた20席が完売されましたが、空席はまだあります。北都観光が、出発地からのパック旅行などについて、個別に対応してくれます。

また、宿については、8月26日を最終締め切りとして、引き続き受け付けています。詳しくは下記までお問い合わせください。

〒097-0022

稚内市中央1丁目3番21号
北都観光株式会社(担当:内山啓一)
tel.0162-23-3820 fax.0162-22-4252

国際シンポジウム「21世紀のチェーホフ」

日本ロシア文学会では、チェーホフ没後百周年を記念して国際シンポジウム「21世紀のチェーホフ」を開催いたします。

日時 2004年9月24日(金)午後1時30分～6時00分
場所 アートスフィア(天王洲アイル 〒140-0002 東京都品川区東品川2-3-16)
入場料 1500円(全席自由・税込)

開会の辞 川端香男里(日本ロシア文学会会長)

第1部「チェーホフと世界」1時40分～3時30分

パネリスト アレクサンドル・チュダコフ(世界文学研究所主任研究員)

岩松了(劇作家・演出家・俳優)

浦雅春(東京大学)

多和田葉子(作家)

司会 楯岡求美(神戸大学)

第2部「チェーホフと現代」

パネリスト ユーリイ・ソローミン(マールイ劇場芸術監督)

イリーナ・ムラヴィヨワ(マールイ劇場俳優)

キム・テフン(金泰勲)(韓国・地球演劇研究所俳優)

牧原純(チェーホフ研究家)

司会 堀江新二(大阪外国語大学)

閉会の辞 井桁貞義(日本ロシア文学会副会長)

主催 日本ロシア文学会 / チェーホフ東京国際フェスティバル実行委員会 / アートスフィア / 阿部事務所 / 朝日新聞社

助成 国際交流基金

後援 都民劇場 / 駐日ロシア連邦大使館

企画責任 日本ロシア文学会国際交流委員会

チケット予約とお問い合わせは：

アートスフィアチケットセンター(10:00～18:00) 03-5460-9999

<http://www.tennoz.co.jp/sphere/>

電子チケットぴあ 0570-02-9988; 0570-02-9966 (Pコード 355-479)

企画に関するお問い合わせは：

〒113-0023 東京大学文学部スラヴ文学沼野研究室内

国際シンポジウム「21世紀のチェーホフ」事務局

ファックス 03-3777-8257

E-mail chekhov21@hotmail.com

学会員の方は、チケット販売とちらしの配布にご協力くださるよう、お願いします。上記シンポジウム事務局にご連絡くだされば、必要な枚数のちらしを無料でお送りいたします。

また、チケットは、学会員の方には特別割引価格 1200 円で（さらに 10 枚以上一括の場合は、一枚 1000 円で）販売いたします。教員の方はぜひ学生の皆さんに勧めてください。お申し込みは、シンポジウム事務局まで E メールかファックス等で。代金後払いで、チケットを折り返しお送りします。

チケットは、上記アートスフィアチケットセンターや電子チケットぴあでも予約・購入できますが、その場合は学会員でも通常料金となりますのでご了承ください。

なお、シンポジウムの事務局は、上智大学の学会事務局とは別です。くれぐれもお間違えのないようご注意ください。

没後百年記念 チェーホフ展

9月23日（木・祝）から10月16日（土）まで

東京・駒場 日本近代文学館にて

9：30 am～4：30 pm（日・月は休館）

入場料 300円

主催：チェーホフ没後百年記念祭実行委員会
日本ロシア文学会